

インド正量部による世界の歴史：『大いなる帰滅の物語』内容梗概

岡野， 潔

<https://hdl.handle.net/2324/25291>

出版情報：論集．(38)，pp.1-19，2011-12．印度学宗教学会
バージョン：
権利関係：



印度学宗教学会 論集 第38号

平成23年

インド正量部による世界の歴史

——『大いなる帰滅の物語』内容梗概——

岡野 潔

インド正量部による世界の歴史

——『大いなる帰滅の物語』内容梗概——

岡 野 潔

『大いなる帰滅の物語』(Mahāsanvartanīkathā)は最高級の文学作品ながら、同時に論書さながらの緻密さをもつ内容の濃い作品であり、論書と同じように作品全体の構成を常に意識しつつ読むべきであるが、しかし作品の全体像を得ることは、全篇が韻文であることもあり、さほど容易なことではない。私はこれまで毎年、この作品の部分訳を九州大学の『哲学年報』誌上に発表して、二〇一二年春に全部の和訳を完成させることが出来たので、その基礎作業に基づいて、以下のように作品全体の梗概を作成してみた。本作品の内容に関心をもたれた方は、まずこの内容梗概に目を通してから、それぞれの箇所詩節の読解に進んでいただきたいと思う。

以下、丸カッコの中にあるのはMSKの詩節の番号である。例えば(1.1.1)とあるのは第一章第一節第一詩節を意味する。

第一章第一節『序』(upodghāta)

吉祥偈(mangala)をもつて釈尊を讃える(1.1.1)。釈尊が説かれた世界の生成展開と帰滅の法話を、私(作者)は再話しよう(1.1.2)。この法話は灯明のように人の無知の闇を消散させるだろう(1.1.3)。本作品は説法の因縁(nidāna)から始まるが、優美な言葉に耳を傾けなさい(1.1.4)。

第一章第二節『王子が現れる』

カピラヴァストゥという輝かしいシャーキヤ（釈迦）族の王都があった。繁栄する美しい都城であった（1.2.1-7）。シュッドーナ（浄飯）という偉大な王が国を治めていた（1.2.8-13）。王にはマヤーというきわめて美しく慈悲深い妃がいた（1.2.14-17）。

菩薩は兜率天から正念を保ったまま下生してマヤーの胎に入った（1.2.18）。菩薩を保護するため護世の神々（lokapāla）が天から来た（1.2.19）。菩薩は母胎の中で光り輝き、母マヤーは民衆のために布施に励んだ（1.2.20）。

菩薩が母胎から生まれ出た時、世界を照らす光明を放った（1.2.21）。菩薩が生まれ落ちる時、インドラ神などが光り輝く体の彼をもちかかえた（1.2.22）。誕生の瑞相として大きな地震が起こった（1.2.23）。香風が吹き、空中では天女が楽器を奏で、舞い踊った（1.2.24）。また瑞相として季節の巡りが順調となった（1.2.25）。

長老たちは誕生した王子をシッダールタと命名した（1.2.26）。王子が世界の唯一の守り主となるだろうと一人の偉大な苦行者（アシタ仙）が予言をした（1.2.27）。

王子は成長し、民衆に惜しみなく喜捨を行なった（1.2.28）。彼は学問・技芸に秀でた美しい青年となり、妻を娶った（1.2.29）。王子は正しい法の執行により輝かしい名声を得た（1.2.30）。

シュッドーナ王は王子の出家を阻止するため、女たちをかしずかせた（1.2.31）。王子にかしずく女たちは極めて美しかった（1.2.32-33）。しかし王子は老人・病人・死人に遇ったため、女たちに心向けることは無かった（1.2.34）。

第一章第三節『仏陀たることに達する』

王子は神々の王たちに励まされ、出家して森に入った（1.3.1）。彼は剃髪し、神に与えられた袈裟衣を着けた（1.3.2）。幾人かの師のもとで学んだが、満足を得られなかった（1.3.3）。

彼は忍辱の剣で魔軍を打ち破り、悟りに達した（1.3.4）。涅槃という不死の甘露を得た（1.3.5）。両極端の見解を捨てて

中道を取り、修習して煩惱を滅し、最高の境地を得た（1.3.6）。

成道直後の瑞相として、大光明が発せられて世界を照らした（1.3.7）。また瑞相として、大きな地震が起こった（1.3.8）。海は大きく波立った（1.3.9）。神々は天空で舞い踊り、歌った（1.3.10）。

釈尊はしかし世俗の執着（āgras）を楽しむ人々への伝道を躊躇した（1.3.11）。彼は梵天の勧請により、初めて法輪を転じた（1.3.12）。それにより、五比丘は神々とともに真理を悟った（1.3.13）。その時、初転法輪により五比丘が悟ったという報せは、地界のヤクシャから発せられて天界を上へ伝って有頂天にまで達した（1.3.14）。初転法輪の時の瑞相として、海と大地は震動し、神々は踊った（1.3.15）。また瑞相として、大光明が発せられ、世界と世界の中間の闇を照らした（1.3.16）。

その後カーシャパ三兄弟とその弟子たちが仏教に帰順した（1.3.17）。また仏はマガダ国のビンビサーラ王に法を説いた（1.3.18）。『釈尊の双弟子と呼ばれる』舍利弗と目連が教団に加わった（1.3.19）。

第一章第四節『外道の推伏』

釈尊の教えは賢者たちに尊ばれて、外教の誤った見解はいったん消えうせた（1.4.1）。しかしその後、まるでどこからか蚊蚊が発生するように、外教の諸教団が発生して、以下に述べるような見解を唱えつつ、ブンブンとうるさく言い立てた（1.4.2）。

「生類の成り立ちに関する、外教の四種の見解」 第一の見解として、外教の或る者たちは、生類を含むこの世界は主宰神によって創造された、という主張（主宰神創造論）を唱えた（1.4.3）。第二の見解として、生類は地水火風の四大元素の自性から自然に発生した、という主張（無原因発生論）を外教の或る者たち（ローカーヤタ）は唱えた（1.4.4）。第三の見解として、生類が劫ごとに出現したり消滅するのは、昼と夜の星のように顕れては隠れることを繰り返しているだけで、永遠に有としてあり続ける、という主張を外教の或る者たち（サンキヤ）は唱えた（1.4.5）。第四の見解として、この世界

の知覚はすべて迷妄であつて、本当は何も実在しない、という主張（知覚錯誤論に基づく一切無論）を外教の或る者たち（一種のローカーヤタ）は唱えた（1.4.6）。

それら四種の外教の前主張に対して、それぞれ仏教徒からの反論が示される。外教の第一の見解に対する仏教徒の反論（1.4.7）。外教の第二の見解に対する仏教徒の反論（1.4.8）。外教の第三の見解に対する仏教徒の反論（1.4.9）。外教の第四の見解に対する仏教徒の反論（1.4.10）。

仏教の正しい見解として、生類を含む世界は因と縁によつて成り立っていて生滅するものであると、釈尊は法話で説かれた（1.4.11）。

第二章第一節『虚空に棲む神々の出現』

「以下、世界の生成展開と帰滅の法話がなされる。」

成劫の初め（第一劫）に梵天の「空の」宮殿が、生類の住処（欲界）よりも上方の場所に、業の力により出来た（2.1.1）。光音天（ābhaya）から死没して下生した一人の梵天がその宮殿に入った（2.1.2）。その梵天は十劫の間瞑想に耽った（2.1.3）。

「成劫第十一劫に」その梵天（大梵天）が憂いて「ああ他の生物もいたらいいのに」と思った時、同じ世界に他の梵天たちも転生して来て誕生した（2.1.4）。梵天は自分の思考が彼らを創造したと思ひ込み、「大梵天という」高位に昇った（2.1.5）。遅く生まれた梵天たちも彼（大梵天）を創造神と思ひ込んだ（2.1.6）。それぞれ宮殿の発生を伴った、それらの梵天たち（最初の梵天の近侍である神々）の誕生は一劫の間続いた（2.1.7）。

「第十二劫に」それらを鏡で映したかのように似た、梵身天（brahmakāyika）という梵天たちとその宮殿群が、その下方に発生した（2.1.8）。「第十三劫に」さらにそれらを鏡で映したかのように美しい、梵輔天（brahmapurohita）という梵天たちとその宮殿群が、その下方に現れた（2.1.9）。「第十四劫に」業により他化自在天（paranimitavāsartin）の神々と住所

がその下方に現れたが、その世界の高い位置にはカーマ神（kāma 魔天）の住居が位置した（2.1.10）。「第十五劫に」業により化樂天（nirmitarati）の神々と住所がその下方に現れた（2.1.11）。「第十六劫に」業により兜率天（rūṣita）の神々と住所がその下方に現れた（2.1.12）。「第十七劫に」業によりヤーマ天（yama）の神々と住所がその下方に現れた（2.1.13）。このように六つの欲望の神々の世界（六欲天）が、それぞれ先行する世界よりも下へ下へと、一劫ごとに生じた（2.1.14）。

第二章第二節『大地の住所「の成立」』

「成劫第十八劫に」ヤーマ天が前世で見た前の劫の地上世界の有様を想起して、下方の地上世界があつた空間を見に降りていった（2.2.1）。「ここにスメール山があつた」等と思ひ出したヤーマ天の身体から風が発生した（2.2.2）。風が増大して、第一層・風輪が円筒状に形成された（2.2.3）。その風輪の上に業から生じた巨大な雨雲が雨を降らした（2.2.4）。風はその莫大な雨水を包み込んで支え、第二層・水輪が円筒状に形成された（2.2.5.6）。まるで煮られた乳に乳膜が生じるように、その水輪の表面に泥の膜が生じ、第三層・地輪が形成された（2.2.7）。

業の力によつて風がその泥を吹いて、地上世界の全体の地形を作り始めた（2.2.8）。風は吹きつけて世界の中央に四角形のスメール山を形成した（2.2.9）。風は七つに分かれて吹いて七山と七内海を形成した（2.2.10）。風は地上世界の縁を周回して、チャクラヴァーラ山と外海を形成した（2.2.11）。風は四維の方角に地を掘って四つの場所内で海と外海を合流させ、四大陸を形成した（2.2.12）。九山は泥から次第に堅固な宝石から成る状態になった（2.2.13）。

大雨が降つて、海や湖池であるべき大地の窪んだ場所に水が溜まつた（2.2.14）。

第二章第三節『スメールに住む神々の出現』

こうしてスメール山が出来ると、山頂にインドラ神などの三十三天の神々が誕生し、山の中腹の四つの出っ張りに四大王天が誕生した（2.3.1.6）。スメール山頂に神々の王都スタルシャナが形成された（2.3.7-12）。ユガンダラなどの環状山脈

にも四大王天が住み、またスメール山の四つの出づ張りにある四つの王都に四大王天の各王が住んだ(2.3.13)。インドラや四大王天の四王に統治されて、神々は天女たちと楽しく時を過ごした(2.3.14-19)。神々はアスラと戦争をなし、戦勝の祝祭を楽しんだ(2.3.20)。以上で第十八劫が過ぎ去った(2.3.21)。

第二章第四節『死すべき者(人間)の出現』

成劫の第十九劫と第二十劫の二劫の間、地上に最初の人間たちが現れて、身体から光を発し、空を自由に飛び回っていた(2.4.1)。

或る人間がラサー(rasa)という神話的食物を初めて食べ、それを見て他の者たちも食べ始めた(2.4.2)。ラサーを食べ続けたため、人間たちは体が重くなって空を飛べなくなり、身体の光を失った(2.4.3)。人間たちが光を失うと、天空に太陽と月が星宿とともに出現した(2.4.4)。それらの天体の出現をもって成劫の二十劫すべてが終了した(2.4.5)。

第三章第一節『食物の出現』

「住劫の初劫と第二劫の間」地上の人間がラサーを食べする時代がなお続き、人間の容色に相違が現われ、或る者たちは食べ過ぎて肌が黒く醜くなったが、或る者たちは少食のため肌が白く美しかった(3.1.1)。白く美しい者たちは黒く醜い者たちを軽蔑し、高慢が強くなったため、それが原因でラサーが地上から消滅した(3.1.2)。

「第三劫に」困窮する人類を救うかのように、第二の神話的食物である地のバルパタカ(ohu-parpataka)が出現した(3.1.3)。「二劫の間」人間がそれを食べする時代が続いたが、再び容色における高慢が強くなったため、バルパタカが地上から消滅した(3.1.4)。「第五劫に」第三の神話的食物であるヴァターラター(vatāraṭa)が大地に出現し、「二劫の間」それを食べする時代が続いた(3.1.5)。また人間は高慢になり、ヴァターラターは消滅した(3.1.6)。

「第七劫に」粃殻などがない、刈ってもすぐに自然に生える野生の稲が大地に出現した(3.1.7)。稲を食べるうちに人の

身体が変化し、それまで無性であった人類に男女の身体的違い(linga)が出来た(3.1.8)。女性の体を見て人々はそれを墮落した者と見なし、女性差別が始まった(3.1.9)。人々が裸であることを恥じるようになった時、自然に衣を穿らせる神話的な樹(如意生衣樹)が大地に出現し、その樹の衣服を着始めた(3.1.10)。男女が相互に見つめあうと、性的な欲望が生じた(3.1.11)。性行為が始まった(3.1.12)。人々は性行為を不道德なものとして非難し、その行為者に土や草を投げつけた(3.1.13-14)。周囲の人々の非難によって性行為を恥じた者たちはしばらくの間林に行った(3.1.15)。やがて人々は頻繁に性行為を行うようになり、それを隠すために家造った(3.1.16)。

人々は朝夕二回、野生の稲を取りに行つて食べた(3.1.17)。刈られても半日後には再び稲が生じた(3.1.18)。人々は食事のたびに稲を取りに行くのを億劫がるようになり、稲をまとめて刈り取つて、各自の家に貯蔵した(3.1.19-23)。家に稲が蓄えられると、男女は家に一緒に住むようになった(3.1.24-25)。人類がラサー・バルパタカ・ラター・自然稲を食べていた時代はそれぞれ二劫であり、以上で住劫の八劫が過ぎ去り、「現在劫」の第九劫が到来した(3.1.26)。

第三章第二節『生計の手段の開始』

「住劫第九劫に」人間の甚だしい食欲を原因として、稲の性質が変化し、胚芽と粃殻をもち、一度刈つたらもう生えてこない、現在の栽培種の稲が出現した(3.2.1)。稲の貯蔵に起因する人間の悪徳の結果をそこに見て、人々は自分を咎めた(3.2.2)。人々は過去の食物消失の歴史をふり返った(3.2.3-4)。

今や稲そのものが地上から消失してしまつことを恐れ、食欲という悪徳を捨離するために、各人が所有する稻田の広さを平等に定めることが提案された(3.2.5-6)。集会でその提案が同意され、稻田の測量がなされ、男に六由旬、女に四由旬の田が与えられた(3.2.9-11)。その後、人々が非法に耽つたので、衣を生やす樹(如意生衣樹)が地上から消滅した(3.2.12)。その種子から現在の綿の木(karpāsa)が生じた(3.2.13)。

人々が稻田を私有するようになると、欲深い者が稲を盗む行為をするようになった(3.2.14)。盗んだ者に人はその行為

をやめるように忠告した(3.2.15-16)。その者は「もうしない」と嘘をついて、再三、稲の盗みを繰り返した(3.2.17)。盗まれた人々は怒って盗人に暴力をふるった(3.2.18)。人々はその盗人が負った傷を見て、傷害という罪の行為を非難した(3.2.19)。人々は集まって、盗み・嘘・暴力という罪が出現したことを嘆き、良策を相談して、王という地位を作って一人を王に選出することで、彼に適正に人の処罰や庇護を行ってもらうことを決めた(3.2.20-24)。人々は最も尊敬される有徳の人のもとに赴き、王になつてくれるように頼んだ(3.2.25-30)。人々は王による保護・統治と引き換えに稲の六分の一を税として与える約束をし、彼は王になることを同意した(3.2.31-32)。

第三章第三節『階級(ヴァルナ)の分離』

世界最初の王が灌頂をもって即位した(3.3.1)。彼は適正に悪人を罰した(3.3.2)。王は正しい生き方について説法を行った(3.3.3-11)。王は法話によって人々を喜ばせた(Grāhṇa)(3.3.12)。「その時王(Vṛjan)という名称が生じた。」王の感化により、世界にあらゆる悪行が消え、十不善業道が言葉としてしか存在しなかった(3.3.13-16)。王は多くの人々に尊敬されたため、マハーサンマタ(Mahāsammata)と呼ばれた(3.3.17)。田の土地(Kṣetra)を守る者であるため、王に属する集団はクシャトリヤ(Kṣatriya)と呼ばれた(3.3.18)。

しかしながら様々な所有物への人々の執着が増大するにつれ、十不善業道の様々な罪悪が世に出現し始めた(3.3.19)。所有物を非難して、ある者たちは財を捨てて森に棲み、バラモン(brahmaṇa)と呼ばれた(3.3.20)。バラモンたちは自ら作ったヴェーダ聖典を学び誦するので、アディアーヤカ(ādhyaśaka 学生)と呼ばれた(3.3.21)。

ある者たちは森での隠遁をやめて、家住を喜び、田で牡牛(vṛṣan)のような振舞いをしたので、ヴリシヤラ(vṛiśāla シュードラ)と呼ばれた(3.3.22)。またある者たちは一切の技芸・工芸を行い、ヴィシュ(Viśu ヴアイシャ)と呼ばれた(3.3.23)。ある者たちは盗賊(candā)を処刑した故に、チャンダーラ(candāla 旃陀羅)と呼ばれた(3.3.24)。「死刑執行人としての」彼らはその非道徳行為のゆえに市民社会から放逐された(3.3.25)。

第三章第四節『様々な食物の出現』

稲はやがて味が劣化し、人々はうんざりした(3.4.1)。すると豆類などの様々な「副食物」(anubhojana)が出現した(3.4.2)。また胡麻や、大麦・小麦などの穀物も生じ、汁の多いものであった(3.4.3)。砂糖黍も生じたが、表皮や葉などがなく、最高質の甘い味の汁をもつものであった(3.4.4)。

化生として牛たちが世に出現して、自ら進んで容器に乳をくれた(3.4.5)。牛乳は人が働かなくても自然にチャニンングされて、生バターが生じ、ギー、さらに醍醐が生じた(3.4.6)。象や馬などの乗用獣が出現し、自ら進んで人間に飼い馴らされた(3.4.7)。

マハーサンマタ王に「転輪王としての」七宝が出現した(3.4.8)。王が統治していた間、すべての人はあらゆる食物と物品(資具)をそなえて幸せだった(3.4.9-14)。人間はまた美しい身体(依止)と長い寿命(寿量)を享受した(3.4.15)。人間が住む大地の世界は神々が驚くほど美しかった(3.4.16)。

第四章第一節『生活の資を』求め努力することの開始』

その後マハーサンマタ王が亡くなり、さらに彼の子孫の歴代の王たちも、その家臣たちも死んで、大地はかつての輝きを失った(4.1.1)。その後も王統は続いた(4.1.2)。

人類は不法に陥り、自然に得られる食物が減ったので、人々は耕作を開始し、自分で犁を曳こうとした(4.1.3)。それを見て牡牛たちは収穫の分配を条件に、自ら犁を曳くことを人間に申し出て、働いた(4.1.4)。収穫期に約束どおり人は牡牛に収穫を分け与えた(4.1.5)。それを見て、乗用獣たちも同様に約束して人間の乗物として働くようになった(4.1.6)。

雌牛たちが自ら乳を与えようとしていないのに、人間は努力して搾乳を始めた(4.1.7)。人間たちの食欲を恐れるかのように、砂糖黍は葉で覆われるようになった(4.1.8)。他の胡麻などの食用植物も変化して多汁ではなくなった(4.1.9)。すべての食物が劣悪化したため、人類の平均寿命は減少し始めた(4.1.10)。

その後食欲が増した農夫たちは牡牛たちに収穫の分け前を与えなかったため、牡牛たちは犁耕に不従順になった(4.1.11)。すると人間は牡牛たちを鞭打ち、鼻に紐を通し、脅しつけたので、牡牛たちは言葉を話せなくなった(4.1.12)。彼らは酷薄な人間たちに絶望的に服従し、重い犁を曳き続ける(4.1.13)。人間に反抗的になった象や馬などの乗物獣たちも手綱をつけられて制御され、鞭打たれた(4.1.14)。搾乳を嫌がる雌牛たちも堅い紐で縛られて、巧妙なやり方で乳を搾られた(4.1.15)。

砂糖黍が変化して厚い皮に覆われたので、压榨してようやく汁を取り出すようになった(4.1.16)。また胡麻などもさらに変化してひどく汁がないものになった(4.1.17)。このように食物がいつそう劣悪化したため、人間の身体はさらに劣弱なものとなった(4.1.18)。

第四章第二節『カリ』の時代』に入る』

人々は五濁に墮落し、誤った見解をもつ者たちが師として不正の道を教えた(4.2.1)。人々は生計に逼迫し、また欲を募らせて、農耕や牧畜などの労務を始めた(4.2.2)。

食物がひどく劣悪化して、労務をして食を得てもわずかな快しかなかった(4.2.3)。労苦により胡麻と砂糖黍と牛乳を得ても、それからさらに精髓(胡麻油・砂糖黍汁・加工乳製品)を得るのには別の労苦が必要になった(4.2.4)。食物が劣悪化したので、人の寿命などが甚だ減じた(4.2.5)。

大地のあちこちに村や町や都城がたくさん出来た(4.2.6)。「過去三仏が現れ、その後カリ・ユガという最後の時代になった。」釈迦牟尼仏が出現した(4.2.7)。

釈尊のもとで人々は道徳的になり、悪い生き方が消え去った(4.2.8)。釈尊が解脱の道を教示したので、弟子たちは解脱を得た(4.2.10)。釈尊は正しい教えを存続させる僧伽を設立し、涅槃に入られた(4.2.11)。涅槃後の二箇月目に、五百人の阿羅漢が「七葉窟で」合誦(第一結集)を行った(4.2.12)。涅槃後の百年に、七百人の阿羅漢が合誦(第二結集)を

行った(4.2.13)。

涅槃後の四百年、諸部派が分裂した時代に、ヴァートシープトラ(Vasiputra)により一部派の結集が行なわれた(4.2.14)。「犢子部(Vāśīputrīya)が出来た。」その後涅槃後の七百年に、聖サンミタ(Sammita)によりその部派の結集が行なわれた(4.2.15)。「正量部(Saṃmitīya)が出来た。」涅槃後の八百年に、ブーティ(Bhūti)とブッダミトラ(Buddhamitra)が部派結集を行った(4.2.16)。「それは正量部にとって第五の結集となった。」

高僧ブーティとブッダミトラは予言して、現在の劫は住劫の第九劫であるが、あと七百年の時間が劫末までに残されていると語った(4.2.17)。彼らは今後胡麻油・砂糖黍汁・ギーなどの精髓がもつと得にくくなるだろうと説いた(4.2.18)。今の人間がもつ少しの福分のおかげで、食はまだ完全に劣悪化しておらず、胡麻油などはまだ消えていない(4.2.19)。

第四章第三節『中間「劫」のカタストロフの出来事』

劫末に炎となって燃え上がるであろう飢饉(durbhika)と疾疫(yoga)と刀兵(sastra)という三種のカタストロフの火が、今や煙を出し始めている(4.3.1)。人間のもつ慳吝心・害心・瞋恚心の増大がその三種のカタストロフの火を燃えあがらせるためのそれぞれの燃料になる(4.3.2)。大雨・旱魃・局地的豪雨・非時の雨が、飢饉を増大させる(4.3.3)。

この第九劫の劫末のカタストロフでは、飢饉が中心になり、疾疫と刀兵が随伴するかたちになるだろう(4.3.4)。世界に飢饉が起こり、食物が入手困難になるだろう(4.3.5)。食物のため人々は略奪し、殺し合うだろう(4.3.6)。国々・村々・家々は飢饉によって次第に滅びるだろう(4.3.7)。人の不道德性のゆえ、季節の巡りは不規則になり、食物を劣悪化させるだろう(4.3.8)。

悪化した食物のせいで、様々な種類の疫病が、ピシャーチャ鬼をお供にして、現れるだろう(4.3.9)。疫病とピシャーチャ鬼を鎮撫するため、人々は生贄を捧げて供儀を行い、災禍を悪化させるだろう(4.3.10)。このように国々・村々・家々は疫病によって次第に滅びるだろう(4.3.11)。

また互いに害心を抱く利己的な人々によって、大いなる刀兵（戦争）が起こる（4.3.12）。東西南北の諸王は相互に他国を滅ぼそうと攻撃するだろう（4.3.13）。王たちが相互に起こす反乱によって、絶えず国々が滅んだり興ったりするだろう（4.3.14）。諸王家は食欲に起因する怒りの火で互いを燃やしあつて滅んでゆくだろう（4.3.15）。このように残りの国々・村々・家々も互いに攻め合い、怒りの火によって滅びるだろう（4.3.16）。

わずかに数人でも、出会うと、手にした草すら悪業のために刀と化して、たちまち殺し合いを始めるだろう（4.3.17）。三種のカタストロフの最後に近づいた人類はわずか十歳の平均寿命をもつが、その期間は七十年続くだろう（4.3.18）。そして劫の終末のカタストロフが起き、飢饉のそれは七年七月七日、疾疫のそれは七月七日、刀兵のそれは七日の間、続くだろう（4.3.19）。この時に、人類は悪に没頭し、ほとんどが死後に悪趣に赴くだろう（4.3.20）。

劫の終末のカタストロフが来た時、世間から遠離れた或るひとりの人間は、死にゆく人々に慈悲の心を抱くだろう（4.3.21）。人類を絶滅させまいとして、悪い時代においても善人でありつづけた少数の生き残りの人を、ヤクシャ（鬼神）の王たちは守護するだろう（4.3.22）。

カタストロフから生き残った人々に、やさしい同情の心が生じる時、恐ろしい劫の残りは消え去るだろう（4.3.23）。

第四章第四節『第十く第二十劫の』十一から成る劫の歴史』

住劫の第十劫が始まり、劫末のカタストロフを生き残った人々は互いに見合つて歓喜し、抱擁しあうだろう（4.4.1）。人間たちは正しい道を歩み始め、遊星たちの軌道、諸季節の巡りも、正しいものとなるだろう（4.4.2）。人の内なる心のあり方と、外的世界のあり方が合致し、世界に正しい法の支配と、完全な安楽とが現れるだろう（4.4.3）。

生き残った人々から次の世代が生まれて、平均寿命は二万年に伸び、その後の世代では四万年に伸び、さらに後の世代では八万年になるだろう（4.4.4）。

平均寿命の頂点（八万歳）に至った人々の家の娘たちは五百歳で結婚適齢期となるだろう（4.4.5）。その時代の人々は、

寿命の長さに相当して、美しい容貌やその他の性質でも秀でたものとなるだろう（4.4.6）。その時代に、村々が増えて、相互に鶏鳴が聞こえるほど隣接するほどになり、大地は村や都市で充ち満ちるだろう（4.4.7）。その時代、人が大小便をする大地が割れて吸い込み、地面は元通りふさがつて浄らかさを保つだろう（4.4.8）。その時代、世に苦しみがなくなり、人々は十全なる幸福を味わうだろう（4.4.9-10）。その時代、人は寒さ暑さ・飢え・老い・享受の欲求しか悩まなくなるだろう（4.4.11）。このように人間は最高の寿命の長さを享受し、限らない年の間、繁栄するだろう（4.4.12）。

しかしやがて「住劫の第十劫後半に入ると」人類は墮落し、寿命を減らし始めるだろう（4.4.13）。人類は正しい法を失って「十不善業道に陥り」、平均寿命は十歳になるまで落ち続けるだろう（4.4.14）。再び最悪の有様を第十劫の劫末に得るだろう（4.4.15）。

第十劫と同じように、続く第十一劫から第二十劫においても、人類は劫の前半に楽の状態を、後半に苦の状態を得るだろう（4.4.16）。以上のような経過をもつて、「太陽の出現から始まった」住劫は全二十劫を終えるだろう（4.4.17）。

第五章第一節『生ける者たち（衆生世界）の帰滅』

壊劫第一劫が始まり、先劫の終末のカタストロフを生き残った人々は、友愛の心を抱いて、互いに歓喜するだろう（5.1.1）。「第一劫から」劫初も中間も劫末も、安楽なままで持続するようになり、あらゆる人のもつ友愛心の故に、外的世界もその心と合致した快適なものとなるだろう（5.1.2）。人々は第三の寿量段階の八万歳に達し、友愛から生まれた繁栄を、最終的な世界破壊（pralaya）が開始される時まで味わうだろう（5.1.3）。

その時、地獄・餓鬼・畜生の三惡道すら、友愛を生じて、互いにやさしい心を抱くだろう（5.1.4）。地獄の囚人と獄卒は、自業によって地獄に堕ちたのだから互いに怒るべきではないと反省し、地獄から上の世界に生まれ変わるだろう（5.1.5）。餓鬼道など他の惡趣も、友愛の故に転生し、人界や天界に達するだろう（5.1.6）。正しい法が世界を支配するだろう（5.1.7）。その時、説法人の集団、外教の教団の者たちや光音天の神々が、第二禪を修すべきことを世に広く告げ知らせるだろう

(5.1.8)。人々は過去の最悪の世代が犯した欲望の過ちを彼らから聞いて、第二禪を修し、光音天 (adhāsvāra) に生まれ変わるだろう (5.1.9-10)。その第二禪とは別な三昧のいくつかを修しても、同じ光音天に至るだろう (5.1.11)。人類はみな死後に光音天に至り、地上は無人となるだろう (5.1.12)。光音天より下方の八つの天界にいた神々も、それらの天界を捨て、光音天に達するだろう (5.1.13)。

このように世界から生き物たちが消えてゆく運動は下から上へ、地から諸天界に進んでゆき、それが大梵天に達して、最後に大梵天が命終した時に、終わるだろう。大梵天が、成劫から壊劫までのすべての出来事の唯一の目撃者になるだろう (5.1.14)。千世界の生き物たちが誰もいなくなり、壊劫の前半の十劫が以上をもつて終わる (5.1.15)。

第五章第二節『太陽の出現』の開始 トマ

「壊劫の第十一劫〜第十二劫前半の時間において」生き物たちが完全に消えた後、一劫半の間、地上に雨が降らないので、すべての植物が死滅するだろう (5.2.1)。

「第十二劫後半〜第十三劫の時に」三十三天の高さに、二倍の大きさの第二の太陽が出現して下方を焼き、地上では中小の河が干上がらるだろう (5.2.2)。「第十四劫〜第十五劫前半の時に」ヤーマ天の高さに、さらに二倍の大きさの第三の太陽が出現して下方を焼き、無熱惱池などの大湖が干上がらるだろう (5.2.3)。「第十五劫後半〜第十六劫の時に」兜率天の高さに、さらに二倍の大きさの第四の太陽が出現して下方を焼き、七大河が干上がらるだろう (5.2.4)。「第十七劫〜第十八劫前半の時に」化樂天の高さに、さらに二倍の大きさの第五の太陽が出現して下方を焼き、大海を蒸発させるだろう (5.2.5)。その時、大海は次第に浅くなつてゆくだろう (5.2.6)。大海すら干上がることは、一切の有為法が無常である (anitya) ことを示す (5.2.7)。それは、一切が恒常ではなから (na dhruva) ことを示す (5.2.8)。信頼できない (anāśvasika) ことを示す (5.2.9)。つかのまのもののたる (na anivara) ことを示す (5.2.10)。壊れやすから (bhidura) ことを示す (5.2.11)。衰滅するものたる (janjara) ことを示す (5.2.12)。安息処にならなから (na layana) ことを示す (5.2.13)。

依り処にならない (na śaraṇa) ことを示す (5.2.13)。輪廻の生存は厭悪すべきものである (vinirid-) ことを示す (5.2.14)。輪廻の生存に欲求を失うべきである (virāṇi-) ことを示す (5.2.15)。

「第十八劫後半〜第十九劫の時に」他化自在天の高さに、さらに二倍の大きさの第六の太陽が出現して下方を焼き、大地は煙を出し始めるだろう (5.2.16)。「壊劫の第二十劫に」初禪天 (梵天界) の高さに、さらに二倍の大きさの第七の太陽が出現して、下方の世界すべてを燃やし尽くすだろう (5.2.17)。千世界の千のスメール山の上にそれぞれ七つの太陽が並ぶだろう (5.2.18)。

第五章第三節『物的世界の帰滅』

七つの太陽の火によって、世界という亡骸の火葬がなされるだろう (5.3.1)。大地は火に焼き尽くされるだろう (5.3.2)。大海があつた所も炎となるだろう (5.3.3)。スメール山も燃え、崩落するだろう (5.3.4)。火に熱せられた大地は、下にあって水輪を蒸発させるだろう (5.3.5)。外器世界を燃やす火は、一切を食い尽くした後に、自ら消滅するだろう (5.3.6)。七つの太陽による焼尽は、第一から第六の太陽まではそれぞれ一劫半、第七の太陽は一劫かかって、世界を焼く (5.3.7)。世界と一緒にすべての太陽も燃え尽き、消滅するだろう (5.3.8)。

大梵天は、火が最後に梵天界に達した時に命終し、世界破壊の上限である光音天に生まれ変わるだろう (5.3.9)。大梵天がいなくなった後の宮殿は火に破壊されるだろう (5.3.10)。このサハー (娑婆) 世界すべてが、火によって消滅するだろう (5.3.11)。この壊劫の全二十劫が過ぎ去る (5.3.12)。

第五章第四節『輪廻を厭離する』

それゆえ一切の造られたもの (有為法) は無常である (anitya) と知れ (5.4.1)。それは恒常ではなから (adhruva) と知れ (5.4.2)。信頼できないものの (anāśvasika) と知れ (5.4.3)。つかのまのものの (itvara) と知れ (5.4.4)。壊れやすから (janjara) と知れ (5.4.5)。

(bhidura) と知れ (5.4.5)。衰滅するもの (vijarjara) と知れ (5.4.6)。避難所にならなうもの (na trāṇa) と知れ (5.4.7)。安息処にならないもの (na layana) と知れ (5.4.8)。依り処にならないもの (na śaraṇa) と知れ (5.4.9)。それゆえ輪廻の生存を厭惡すべきである (mirvid-) と知れ (5.4.10)。輪廻の生存に欲求を失うべきである (virañj-) と知れ (5.4.11)。

第六章第一節『帰滅し終えた状態の時期(空劫)の教義』

以上の経過により、世界があつた場が空っぽになり、四大元素があつた容れ物としての虚空のみが残るだろう (6.1.1)。その何もない状態の空劫は二十劫の間続くだろう (6.1.2)。

劫とはどのくらいの長さであるか、その時間の長さを理解する必要がある (6.1.3)。中間劫 (antarakalpa) の長さを理解するために、二クローシャの大きさの都城と芥子の譬喩による仏の説明がある (6.1.4.5)。また大劫 (mahakalpa) の長さを理解するため、一由旬の都城と山盛りの芥子の譬喩による仏の説明がある (6.1.6)。

空劫が終わって、八十劫から成る一大周期としての大劫が終わり、また成劫に戻るだろう (6.1.7)。大劫が転じることに梵天の誕生から始まる出来事が同じ順序で繰り返される (6.1.8)。

第六章第二節『二つの帰滅の教義』

水災(大三災の第二災)の時は、あらゆる人々は喜を伴った一切の欲を厭い、第三禪に依って、水災の破壊の上限である遍淨天に生まれ変わる (6.2.1)。その時外器世界は、七つの月の出現に起因して増大した水によって壊れる (6.2.2)。

また風災(大三災の第三災)の時は、あらゆる人々は楽を伴った一切の欲を厭い、第四禪に依って、風災の破壊の上限である広果天に生まれ変わる (6.2.3)。その時風が激しく吹き、外器世界を悉く壊す。また地・水・風の集積体も震わせられて消滅する (6.2.4)。

他の諸世界も、われらのサハ世界が大三災によって三様に滅びると同じ仕方滅びる。有為法は堅固ではないという

仏の教えは真実である (6.2.5)。

第六章第三節『真実義を照らし出す』

釈尊は、生類 (jagat) についての業などの原因の説法によつて、シヴァ神原因論(主宰神論)、無原因論(自性による自然発生論)、有の常在論(サーンキヤ)という、世界の始め(前際)に関する外教の「第一く第三の」見解を斥けた (6.3.1)。また仏による大三災(火災・水災・風災)に関する説法は、未来の出来事に関する外道たちの見解を斥けた (6.3.2)。また仏は世界における「地水火風の」燃焼・灌注・震動などの効果的作用性 (arthakriyā) を説き、地水火風が実在しないという一切無を説く外教の「第四の」見解を斥けた (6.3.3)。

仏は苦集滅道を教えて、見道所断の煩惱を断ずるための境地(見道)を教示した (6.3.4)。さらに修道所断の煩惱を断じるために、仏は修道の位を説き、また一切の煩惱を断つために、無学の境地が修せられるべきことを説いた (6.3.5)。あらゆる仏弟子は釈尊の言葉を聞いて、見道・修道・無学道の境地へと導かれるべきである。暗愚さをもたず、正しく見て、仏に心を向けるならば、最高の卓越に至ることが出来よう (6.3.6)。

第六章第四節『師の時節の経過』

釈尊がこの法話を説き終えた時、一連のすばらしい出来事があつた。神々は花を撒き、大地は震動した (6.4.1)。説法を祝うアスラたちの住む海と神々が住む天空とは競うように輝いた (6.4.2)。雲が去って太陽が輝いた (6.4.3)。神々とアスラたちの敵意が消え、神々の集会場は輝いた (6.4.4)。釈尊も四衆に囲まれて、輝いた (6.4.5)。

その後仏陀は他のすぐれた教えを説きながら歳を重ねた後に、涅槃に入られた (6.4.6.7)。釈尊が亡くなられた時、大地が震動した (6.4.8)。人々は真珠のような涙を大地に落とした (6.4.9)。海中のナーガ(龍)たちも涙で海の水を増やした (6.4.10)。十方世界に住む者たちが花香を持って集まり、悲しみの中で仏陀の葬儀がなされた (6.4.11)。仏陀は永き

にわたる利益を人々に与えるため、多量の遺骨(舍利)を残された(6.4.12)。仏の滅後、その教えを覆い隠さんとする多くの悪人どもが現われた(6.4.13)。そのため比丘たちは合誦(結集)をなした(6.4.14)。結集によって正しい意味が確定された伝承に基づき、私(作者)はこの法話を世間の利益のために作る(6.4.15)。

この作品でよいところは仏陀に帰せられ、余計なところは私の責任である(6.4.16)。終わりにあたって、私の希望と抱負を述べるなら、仏の言葉を反復学習し、福德を獲得し、一切のことを理解して、それを掌の上にあるかのようにわかりやすいものにして、人々に教えてあげたい(6.4.17)。

A Chronology of the Universe According to the Sāṃmitīyas

— A Summary of the Mahāsaṃvartanīkathā —

Kiyoshi OKANO

The Mahāsaṃvartanīkathā (“The great discourse on [the evolution and] the devolution [of the world],”) is a treatise on Buddhist cosmology in the form of a Sanskrit kāvya. It consists of 390 stanzas. It aims to systematically represent the unique traditions of the cosmology of the Sāṃmitīya school in the [mūla-]Sthaviravāda branch. This rich yet condensed work is not easy to gain an overview of the contents of this work. Hence, to understand this work, we need a detailed synopsis or summary of its contents besides its literal translation. That is why, in this paper, I provide a Japanese summary of the Mahāsaṃvartanīkathā.

This work is divided into six chapters (kāṇḍa), each containing four sections (viśrāma):

Kāṇḍa 1: The Origin (nidāna). — Viśrāma 1: Introduction (upodghāta). Viś. 2: Buddha's Appearance as a Prince. Viś. 3: His Attainment of Buddhahood. Viś. 4: Defeat of Heretics.

Kāṇḍa 2: The Period of Renovation. — Viś. 1: Appearance of the Gods Living in the Sky. Viś. 2: The Formation of the Earth as an Abode. Viś. 3: Appearance of the Gods Who Lived in Mount Sumeru. Viś. 4: Appearance of Mortals.

Kāṇḍa 3: The State of Perfect Happiness in the Period of Duration. — Viś. 1: Appearance of Food. Viś. 2: The Beginning of Various Means of Earning Livelihood. Viś. 3: Separation of the Castes. Viś. 4: Appearances of Various Foods.

Kāṇḍa 4: The State of Happiness and Misery in the Period of Duration. — Viś. 1: The Beginning of Making Efforts to Seek Foods. Viś. 2: The Beginning of the Age of Kaliyuga. Viś. 3: Occurrences of the Antarakalpa-Catastrophes. Viś. 4: History of 11 Antarakalpas [from the 10th to the 20th].

Kāṇḍa 5: The Period of Destruction. — Viś. 1: The Destruction of the Living Beings' World (sattvaloka). Viś. 2: Appearances of the Suns. Viś. 3: The Destruction of the Receptacle-World (bhājanaloka). Viś. 4: Awakening of Disgust in the Saṃsāra.

Kāṇḍ 6: On Various Topics. — Viś. 1: A Description of the Period of Duration of the Destruction. Viś. 2: The Way the Two Destructions of the World Will Occur. Viś. 3: A Explanation of the Meaning of the Truth. Viś. 4: Passage of the Eras (parvan) of the Patriarchs (guru).